

ドナウ の 四季

2018年・春季号・No.38

腐敗する権力	盛田 常夫	1
幽霊、怨霊、魔女	ガウランド・ロクサナ	5
私が見た日本の学校の風景	コルモシュ・リタ	6
留学生自己紹介	古澄 直子	7
	松井 拓史	8
	谷口 雄紀	10
みどりの丘補習校	クローク 千晴	11
	山本 泉	13
	坂井 圭子	15
日本人学校	柴田 果凜	16
	田村 心奏	17

ハンガリーを代表する赤ワインワイナリー
GEREワイナリーが日本人のワイン愛好家の皆様に、通販サイトを開設しました。

www.gere-club-japan.com

GERE

GERE ATTILA PINCÉSZETE



最高級赤ワインのセットを、ご自宅に配送します。
日本へは国際宅急便(6本の配送費90ユーロ)で、
ハンガリー国内は200ユーロ以上の注文で送料が無料になります。



各種ワインセットの他に、低温圧搾ぶどう最高級オイル、
ぶどうの種と果皮をミクロンのサイズに粉砕した、
ポリフェノミクロンも、通販サイトを通して購入できます。



GERE-CLUB-JAPANの会員になれば、
各種の特典が得られます。GERE ホテルの予約も、
通販サイトを通せば、日本語で予約ができます。



www.gere-club-japan.com

腐敗する権力

ー 王になりたい権力者、権力との癒着、公金横領、権力の末期現象

盛田 常夫

近年、ますます政治家の存在が疎ましい。ロシアも中国も権力者は王のように、永遠の絶対権力を維持したいらしい。北朝鮮を含め、アジアの後進国は21世紀になっても、封建君主制の政治風土から抜け出ることができない。

アジアの後進国に限らず、選挙で選ばれているとはいえ、議席の三分の二を占めるようになると、独裁的な色彩が強まり、永続的な権力維持への誘惑が強くなる。これが政治の魔力である。しかし、すべての権力は腐敗する。国家権力を握る者は、国家資産や国家財政へのインサイダーとして、必ず公的資産や公金へ手を出す。自らが手を出さずとも、側近や家族、身近な友人たちが権力に群がり、富を分け合う仕組みが出来上がる。とくに、子供抱える権力者は、資産を子供に分ける様々な工夫をする。

カーダールが質素な生活を送った一因には、子供がおらず、子供のために蓄財に励む必要がなかったことがある。メルケル首相の人気の高いのも、こういう世俗的な利害に関心がない、つまり「私心がない」からである。しかし、ほとんどの権力者は「私心の塊」である。オルバン首相は5人の子供抱える。自分名義の資産はわずかだが、夫人や子供たちの資産は年々膨張している。一介のガス修理工に過ぎなかったオルバン首相出身地の町長、メサローシュ・リュウリンツは、オルバン首相の盟友として各種の公的事業や補助金を受けたおかげで、短期間(数年)のうちに日本円にして、数百億円規模の資産を蓄えたことで知られている。権力は鍊金機構でもあるわけだ。

世界を見渡しても、人として信頼できる政治家などどこにもいない。後進国家にはマフィアの領袖が大統領や国家のトップに座っている。政敵や自分が気に入らない人物を平気で暗殺し、公開処刑している。プーチンしかり、トランプしかり。習近平や金正恩。わが安倍晋三にしても、どうしてこの程度の人物が一国を率いる政治家なのか理解不能だ。人間的に屑と言われても仕方のないような人物がどうして国民の命運を背負う地位に就けるのか。そういう人物に社会の未来を託す人間社会は、いったい何時になったら賢くなるのだろうか。つくづく社会は不条理だと思う。

もっとも、知性があり、人間的な温かみがあり、社会の未来を見据えることができる人は政治家なんぞにはならない。逆に、粗野で知性に欠け、歴史に学ぶことなく、物事を深く考えることもなく、ただただ単純なスローガンを掲げ、権力欲のある人物が国を支配



野党はソロスの支援を受けて、国境フェンスを解体するという政権政党の選挙キャンペーン (FIDESZの選挙公報紙から)

現代の政治家は当座の問題に没頭するだけで、将来社会の課題に立

ち向かうことがない。選挙で勝つことが宿命づけられているから、どうしても国民の人気を得るようなスローガンや政敵排除に陥りがちである。きわめて短期的な視野で動いている。次の世代に何を残すのかという将来社会の建設に、ほとんど関心がない。しかし、政治の仕事の少なくとも半分は、将来社会の準備であるべきではないのか。

するのが現代政治だ。そういう人物が政治を担う人間社会そのものが、はなはだ未熟だということだろう。

4月8日はハンガリーの総選挙である。国营テレビは連日、政権政党の政策を宣伝し、野党を批判する番組を放映している。FIDESZ政権になってから、メディアの政権政党色が強くなっ

た。今権力に就いている政党も、将来には野党になることもあるのだから、公平性に気を配るべきだと思うが、いったん権力に就くと、あらゆる物を自分の意のままにしたいらしい。明らかに、旧体制の共産党独裁の政治慣習がFIDESZに受け継がれている。社会もまた、常に英雄を待望している。オルバン首相をあたかもカードールであるかのように親しむ高齢者が、とくに地方に多い。もっとも、都市の住民はかなりの程度白けているが。

FIDESZは難民支援にお金をだし、難民・移民の無条件受入れを提唱しているソロスへの批判一辺倒である。「ソロスがEUの難民政策を支配している」、「ソロスに国の運命を決める権利はない」、「野党はソロスからお金をもらって、国境フェンスの解体を目

る」と嫌悪感を露わにしている。ソロスがどのような見解をもっているとも、またそれなりの影響力があるにしても、外国籍の一介の民間人をハンガリー国家の政敵に祭り上げるのは常軌を逸している。そうやってソロスを国民の敵にする方が、世界を良く知らない国民から支持が得られると考えているのだろう。典型的なポピュリスト政策である。

さらに、年金生活者には一律12,000Ftの買い物クーポンを配った。先週、我が家に政府から届いた手紙には、一般家庭にはガス料金の特別支援として、それぞれのガス料金口座に12,000Ftをクレジットすると書いてある。お金を配って国民の支持を得ようとするのも、政治の常套手段である。それほど財政にゆとりがあるのなら、27%の付加価値税を下げてもらいたいものだ。こういう具合に国家財政を動かせるから、いろいろなルートを通して、公金を私財に転換する仕組みが機能している。



FIDESZ系無料紙に掲載された政治キャンペーン。ソロスが野党の党首を操って、ハンガリーを移民に開放しようとしていると批判 (Lokal紙、3月29日号)

論んでいる」、「EUやソロスがハンガリーの未来を決めるのではない。FIDESZはハンガリー・ファーストだ」とう具合に、反ソロスをほとんど唯一のスローガンに掲げている。ハンガリーの将来を決めるもっと重要な解題が山積しているはずなのに。

第一次FIDESZ内閣の外務大臣を務めたヤセンスキーなどは、このFIDESZのキャンペーンにたいし、「余りに国民を見下してい

これにたいして、野党はどうか。1年ほど前までは、社会党は権力奪取の暁には国境フェンスを解体すると主張していたが、選挙が近づくにつれその主張を変えた。今では、「国民が安全を感じている限り、国境フェンスは解体しない」と主張している。もともと、社会党などはEU左派の主張に影響されて、国境フェンス解体と難民・移民の受入れを主張していた。しかし、西欧でも無制限の難民・移民受入れに拒否反応が増しており、政策変更を余儀なくされている。当然のことである。無制限の難民・移民の受入れなど、社会的に機能するはずがない。そういう非現実的な政策を掲げている限り、左派に勝ち目はない。

不思議なことに、政権政党にしても野党にしても、はたまたEU内の議論にしても、難民と移民を区別することなく一緒に扱っている。これが問題の所在を不明瞭にしている。なぜなら、不法入国者の半分以上は、難民ではなく、移民目当てだと見られるからだ。そもそも、居住目的国を指定する「難民」は「難民」ではなく、「移民」に該当する。

「難民」は無条件で国際的に庇護されるべき存在であるのにたいし、「移民」は当該国の主権の範囲内で処理すべき存在である。もっとも、実際問題として、「難民」なのか、「移民」なのかの区別が難しいことが、問題を複雑にしている。身分を証明するものを所持していないから認定が難しい。しかも、ヨーロッパでは「難民キャンプ」に「難民」を収用するのは人権侵害という考えがあり、「難民」であれ「移民」であれ、自由に国内移動が可能になっている。ここにも社会不安を引き起こす原因がある。

すべての国境侵入者を「難民」として扱うのは無理がある。「難民」認定ができるまで、一定の箇所に留め置き、身分が証明されるまでキャンプからの自由移動は制限されるべきだろう。認定問題の以前に、不法な入国者数を制限・阻止しないと、国家機能がパンクしてしまう。だから、国境フェンス解体はきわめて無責任な政治的言明なのだ。

また、「難民」として認定された場合、一定の条件を付け、祖国が平和国家になった場合には祖国に戻る事が基本にならなければならない。もし当該国に定住したいという場合には、「移民」の手続きを行い、各国の移民認定条件に従わなければならない。

このように、「難民」認定の厳格化と、「難民」と「移民」の明確な区別にもとづいて議論しなければ、生産的な議論が成り立たない。EUの主流になっている「無制限受入れ、強制割当」の議論も、「難民」の強制割当に反対する国の議論も、こういう議論の整理を行うことなく、「強制割当反対」という感情論と、「受入れ拒否はEU補助金の削減対象」という脅しの対立に終始している。きわめて非生産的な対立である。

さて、日本の安倍政治だが、安倍支持派には森友学園問題はたいした問題ではないという人が多い。実際、金額的にはたいした額ではない。しかし、問題の本質は金額の多寡ではない。

復古的な歴史認識の再興を待ち望んでいた極右の人々が、安倍首相誕生によって鼓舞され、跋扈しだしたことが一連の問題を惹き起こしているのだ。森友学園問題の本質は、幼稚園児に教育勅語を復唱させる戦前教育の復活を、極右の政治家や右派知識人が褒め称え、学校建設を官邸と官僚が支援したことだ。

問題が公になると、関係していた知識人は手のひらを返すように、学園の教育に口をつぐみ、報酬までもらって講演したことを隠している。何とも潔くないことだ。安倍首相が直接に森友学園の割引払下げを指示したとは思わないが、官邸秘書官が財務省幹部に指示したことは確実である。さもないと、官僚トップが文書改ざんを指示することなどあり得ない。そういう仕組みの正当性が問われているのだ。

森友学園事件とは異なるが、同じくアベノヨイショが権力にすり寄った、金額的に大きな公金横領事件がある。

アベノヨイショ本で首相と懇意となった山口敬之が、強姦告発で窮地に陥った。官邸にアドヴァイスを求めたのだろう。官邸秘書官から紹介されたのが、警察庁から出向している内閣情報官の北村滋だ。山口が切羽詰まり、慌てて、北村情報官へのメールアドレスを間違え、週刊新潮編集部に送ったことから、その関係が暴露された。成田空港での山口逮捕見送りを決めた中村格刑事部長へ指示を下したのは、官邸秘書官から相談を受けた内閣情報室だろう。直接関与していない事件について、刑事部長が1人で判断することはあり得ないからだ。後ろめたいことがあるのだろう。中村格はメディアの取材から逃げ回っている。

山口敬之の権力癒着はこれに留まらない。スーパーコンピュー

タ開発を目指すとして設立されたPEZY Computing社の顧問になって、月額賃料が100万円とも200万円とも言われるザ・キャピタルホテル東急のレジデンスを当てがわれていた。月額の顧問料200万円は、それとは別の報酬である。それだけ払っても、山口の存在が重要だったわけだ。この会社が助成金詐欺で告発され、斎藤社長が逮捕されたが、助成金や貸付金の総額は100億円近くに上る。この異常な助成金や貸付金の決定は、やはり官邸を通して財務省・文科省の担当官僚にプッシュされたと考えるのが普通である。海のものとも山のものとも分からない会社に、これほどの公金が支出されるのは異常だ。山口は安倍首相や麻生大臣にこの会社社長齊藤元章を紹介していたというから、この案件も官邸を経由した助成金詐欺事件である。

この事件が公になって、麻生大臣はそういう人と会ったかもしれないが、毎日たくさんの人と会っているから覚えていないと白を切っているようだが、森友学園と同じである。主張に賛同して口利きをしたのに、自分に都合の悪い状況になれば切り捨てて、火の粉が降りかからないようにするのが、政治家の常とう手段なのだ。

かくように、イデオロギーの同調性を武器にいろいろな人が権力に群がり、権力者はそれを受け入れていく。イデオロギー的に近いという理由で、能力のない大臣を次々と任命していくのも同じ論理だ。それが犯罪を生み、度重なる大臣解任という結果になっている。レベルの低い歴史認識やイデオロギーがベースになっているから、烏合の衆で権力に集る人物の品格も知性も低い。権力（者）の知性レベルも低いから、寄って集って来る人のレベルの低さを判断することができない。そういう負の連鎖が表に出だしたのが、安倍政権の現状だ。権力の末期的現象である。

それにしても、制裁関税適用のトランプ発言は聞き捨てにならない。「いつもニコニコしている晋三は、日本を助けてくれて有り難うというアメリカへの感謝を表現しているのだ」。要するに、自分の意見を言うことなく、ただただニコニコしてゴルフ接待してくれる晋三なら、俺の言うことを何でも聞いてくれるはずだと見下されているのだ。日本への公式訪問に際して、米軍横田基地に飛び降り、アメリカ軍兵士を前に、「アメリカは世界を支配している」と鼓舞し、そこからゴルフ場へ向かうなど、いまだに日本は占領国扱いの域を超えていない。公式訪問先で軍事基地から接待先のゴルフ場に向かい、なあなあの仲を披露するのが公式訪問のメイン行事というのは、後進国ならまだしも、先進国のなかで日本だけだろう。世界の外交を見渡しても特異な関係である。せっせとゴルフ接待する安倍晋三は、政治家というより、アメリカに手もみする町人程度の存在でしかない。だから、最初から見下されている。

アメリカの従者である限り、国際政治で主導権を握ることなどできない。アメリカが北朝鮮と会談するのに、安倍に相談する必要などあろうはずがない。だから、安倍はトランプに拉致問題解決をお願いするだけのことだ。何とも情けない。こういうことだから、対米属国関係下の安保法制は日本にとって何の益もない。た

んに日本がアメリカの戦争に組み込まれるだけのことだ。

最近、文韓国大統領はベトナム訪問に際して、過去の歴史を謝罪した。ベトナム戦争で、アメリカの要請にもとづいて参戦した韓国軍の蛮行を謝ったのだ。アメリカ海兵隊に勝るとも劣らない蛮勇を発揮した韓国軍は、短期間のうちに何万人ものベトナム人を殺害した。アメリカ軍も韓国軍も、村を追われ、都市に流れ込んだベトナム人婦人を雇い、端金（はしたがね）で利用できる売春宿を設立した。

憲法9条を盾に、戦後最大のアメリカの戦争犯罪への参戦を断った日本は、再び過ちを起こさずに済んだのだ。300万とも400万ともいわれるベトナム人の犠牲を伴ったベトナム戦争を忘れてはならない。アメリカにとって、アジアの共産主義者（ヴェトコン）は虫けらで同然の存在だった。日本は太平洋戦争の終戦間際に、

多くの都市でアメリカ軍の無差別爆撃を受けた。独裁者に支配される国なら、非戦闘員でも無差別に殺戮しても構わないという論理は、戦後もアメリカ軍に生き続けている。

近年、ネットでは、安倍首相を批判する者を「売国奴」と呼ぶことが流行っている。しかし、自らの国の命運をアメリカに賭ける政治こそ、売国政治なのではないか。日本の命運をアメリカに託して、ニコニコしている首相など、国辱以外の何物でもない。こんな日本の外交が世界で評価されるわけがない。アジアですら評価されない。対米従属を日米同盟と読み替える政治家は、世界を知らない田舎者か、対米従属を意図的に隠す「売国奴」のどちらかだ。

（もりた・つねお）



公式訪問に先立って、横田基地でアメリカ軍兵士を鼓舞するトランプ大統領



2017-2018年度リスト音楽院日本人留学生 ディプロマ(卒業)コンサートスケジュール



◇宮本 慶子(クラリネット、大学院)

4月28日(土) 19:00 旧リスト音楽院

曲目: Hajdu: Capriccio all' ungarese

Honegger: Sonatine ピアノ: Mali Emese

Stamitz: Clarinet concert no.7 指揮: Berkes Kálmán,

Brahms: Clarinet quintet in B minor, op.115

共演: ヴァイオリン: Matouš Peruška, Talia Herzlich、

ヴィオラ: 長尾春花 チェロ: Kristina Vocetková

◇田嶋 彩芳(ピアノ、大学院)

5月12日(土) 16:00 本館ショルティーホール

曲目: J.S Bach: Chorale from Cantata No.147

Liszt: Venezia e Napoli Tarantella

Stravinsky: Petrushka

Saint-Saëns: Piano concert No.2 op.22

共演: ファイロニ室内管弦楽団



◇後藤 皓斗(ピアノ、学士)

5月15日か16日 時間未定 旧リスト音楽院

曲目: リスト: ダンテを読んでーソナタ風幻想曲 他

※日時・曲目随時更新いたします。

◇新野見卓也(ピアノ、学士)

5月15日か16日 時間未定 旧リスト音楽院

曲目: リスト: バッハの動機による変奏曲 他

※日時・曲目随時更新いたします。



◇谷口雄紀(ピアノ、大学院)

5月22日16:00 リスト音楽院本館ショルティーホール

ヘンデル: シャコンヌ2番 ト長調

モーツァルト: ピアノソナタ18番 ニ長調

プロコフィエフ: ピアノソナタ7番 戦争ソナタ

チャイコフスキー: ドゥムカ

ブラームス: ピアノ四重奏 1番 ト短調 op.25

共演: ヴァイオリン: Péter Sipos, ヴィオラ: Filip-Orban Lilla

チェロ: Jorge Sanz Ramos



◇細見理子(ピアノ、大学院)

5月22日(火) 19:00 リスト音楽院本校舎 ショルティーホール

曲目: プロコフィエフ: バレエ「ロメオとジュリエット」より10の小品 Op.75 (抜粋)

シューベルト: ピアノ五重奏「鱒」イ長調 D.667

シューマン: ピアノ協奏曲 イ短調 Op.54

共演: 長尾春花、ドラフィー・カールマン、白井彩、

ファイロニ室内管弦楽団 指揮: ディネシュ・イシュトヴァーン



注意: 無料コンサートですが、リスト音楽院大ホール及びショルティーホールでの公演はリスト音楽院本校舎内にあるチケットセンター(1061 Budapest, Liszt Ferenc tér 8.)でチケット予約・受け取りする必要があります。

Email: zeneakademia@interticket.hu Tel: (06-1) 321-0690 最新情報は<http://paprikatsushin.blog.fc2.com>

幽霊、怨霊、魔女

Gauland Roxana

私は子どものころからずっと日本の文化に対して強い興味を持っていたが、同時に不思議で怖い話に対しても興味があり、日本文化におけるいわゆる幽霊と、自分の出身国であるハンガリーにおける伝統的な怖い魔女を比較すると、興味深いのではないかと考えていた。だから、ここでは日本の天神様やハンガリーの「トウンデル・セープアッソニ」という魔女について書くことにした。

いわゆる「幽霊」といえば、信じる人もいれば、信じない人もいます。まず「幽霊」の定義を少し明らかにしましょう。幽霊とはゴースト、あるいはファントムのことである。つまり、亡くなった人の魂だ。日本の古い信仰によると、それぞれの人には魂がある。しかし、亡くな



ったときには魂は消えずに肉体から離れたり、死後も存続したりする。そして、暴力的な死亡、殺人や自殺などの場合は、魂は幽霊となり、私たち人間の世界に戻ってきてうろついたりすると思われる。さらに、人がちょうど亡くなった瞬間に嫉妬、または憎しみを感じていたという場合にも、魂は幽霊になってしまうと言われている。現れる場所は、墓場や、殺された、あるいは亡くなった場所、橋や城などである。

日本の幽霊は、三角の白紙でできたいわゆる「ぬかえぼし」をつ

け、白い着物のような服を着ているが、西洋の信仰によると、ゴーストは殺された姿のままで現れる。また、日本文化における幽霊の基本的な特徴の一つは、脚がないということである。つまり、日本の幽霊は歩くのではなく、浮かんでいる姿で現れるという。一方、西洋の信仰では、ゴーストは普通に歩くことが多いと言われている。

日本の幽霊は種類がかなり多いが、ここでは怨霊という種類に焦点を当てる。怨霊とは、恨みを持ち、たたりをおよぼしたりする悪霊のことであり、生きている人に災いを与えるとして恐れられている。皆さんは、菅原道真の名前を聞くと、何を頭に思い浮かべるだろうか。菅原道真は天神様と呼ばれているが、怨霊でもある。道真は平安時代の優秀な学者や政治家などであったのが、道真のことをよく思わない人の陰謀によって地位を失ってしまい、京都から九州に左遷された。というわけで、道真は京都に戻れず、失意のまま亡くなってしまった。それから、さまざまな災害や天変地異が起き、道真の怨霊の仕業とされるようになった。だから、道真のたたりを鎮めるために、天皇が京都に道真の神社を造り、道真をいわゆる天神様としてまつようになった。今でも数多くの受験生は道真の神社に行って合格を祈る。

ハンガリーの信仰についていえば、幽霊、すなわちゴーストは存在しないとされている一方、民間伝承に魔女が何人か出てくる。一番有名な魔女は誰かという、おそらく「トウンデル・セープアッソニ」という魔女だろう。「トウンデル」という言葉を日本語に訳すと、妖精となり、「セープアッソニ」を訳すと、きれいな婦人となる。つまり、きれいな婦人の姿で現れる妖精のことなのである。「トウンデル・セープアッソニ」は肌も長い髪もつやつやで、踊ったり、歌ったり、湖を泳いだりする姿で見られる女性である。一人きりではなく、集団で現れることが多いと言われている。

いたずらが好きで、男性を誘惑したり、馬を連れ去ったり、二つの家族の赤ちゃんを交換したりすることで知られている。それ以外にもいろいろないたずらをする。例えば、人に病気をもたしたり、危害を及ぼしたりする。現れる場所は、人通りが少ない小道、橋や湖畔などであり、ばったり出会わないように、こういった場所を避けた方がいいと言われている。「トウンデル・セープアッソニ」の外見と性格がかなり対照的であるという点から考えると、なぜ魔女とされているかすぐわかるはずである。それは、外見は非常にきれいで穏やかである一方、悪事を働く、ひねくれた性格の女性だからである。

このように、日本とハンガリーの民間伝承にはかなり違う存在が見られるということは面白く、また、文化や考え方の違いも見られると私は思う。だから、近い将来にこの課題を研究することによって、知識を深めたいと思う。

(ガウランド・ロクサナ)

私が見た日本の学校の風景

Kormos Rita

エトヴェシュ・ロラード大学日本学専攻修士課程のコルモシュ・リタと申します。2015年から2016年まで大阪大学、2017年から東北大学に留学しました。大阪に留学していた時、大学から「日本の学校にボランティアとして行きませんか」というメールが届いたのがきっかけで、2016年2月下旬にボランティア活動を始めました。

私は映画でしか見たことがなかった日本の学校に行けるということで、とても楽しみにしていました。大阪では、子どもたちと英語で会話し、ハンガリーのことを少し紹介しました。初めて日本人が通う小学校に行ったので、驚くことが多かったです。例えば、廊下と校庭は壁で完全に隔てられていなかったもので、廊下に出た瞬間2月の寒い風が激しく吹いていました。それでも、子どもたちは半ズボン、コートなしで校庭で遊んでいました。それを見て、母の言葉が頭に浮かび上がってきました。私は「ちゃんと暖かい服を着なさい」とよく叱られたのです。しかし、その小学校では全員そのような制服を着なければならず、ハンガリー人と日本人の考え方は違うということに気づきました。

給食を食べることも初めてでした。小学生が白いエプロンと三角巾をつけて、互いに食事をよそってあげている姿は興味深かったです。やはり、子どもの時からクラスメイトと交代で給食を教室に持って行って、同級生に等しくわけるということを体験するのは人生で役に立つだろうし、子どもたちも楽しそうでした。ハンガリー人もこのように給食を食べられれば、どの休憩時間にどのクラスが食堂に行けばいいかという問題も解決されます。ただ、ハンガリー人みんなの心に残っている、食堂のおばさんの話ができなくなってしまうのが。

このように楽しい経験をしたので、次の留学先となった仙台でも大阪のように学校訪問があるかどうか探しました。仙台に着いてすぐに寮の掲示板で二つのチラシを見つけました。そのうちの一つのおかげで寮の近所にある高校に行けるようになりました。もう一つのチラシから、学校訪問を頻繁に主催している組織を見つけ、そこにも登録しました。大阪では大学を通して学校に行っていました。仙台では大学以外に友達や国際交流を求める組織からも学校訪問の要望を受けることができました。

仙台ではハンガリーを日本語で紹介するイベントが多かったの

ですが、英語の活動に参加することもありました。給食を生徒と一緒に食べることもあれば、食べないこともありました。仙台のいくつかの学校ではスペシャルクラスや特別クラス、マルチェンというクラスがあって、そこでは障害を持っている子どもが勉強しています。ある学校では、給食を彼らと一緒に食べました。子どもたちは最初少し緊張し恥ずかしがっていましたが、私に質問しながら、徐々に仲良くなっていくいろいろなことについて話げできました。休憩の時、紙くずを飛ばす子どももいれば、クラスメイトと遊んでいる子どももいました。休憩が終わったら、簡単な英語を覚えるためのダンスを見せてもらって、とてもいい経験ができました。楽しそうに笑っている子どもたちとハグして別れた素敵な経験を、他の人にもしてほしいという気持ちになりました。



私にとって印象に残っている、ある小学生の女の子を紹介します。英語の授業が終わって、給食の準備をしていた時、その11歳の女の子はこんなことを言いました。「私が英語を勉強して、上手になりたいのは、ナイジェリアや他の国に行ってボランティアとして向こうの人々を手伝いたいからなんだ」。11歳で「他の人を助けてあげたい」、「だから英語がうまくなりたい」ということをまじめに考えていることに感動しました。しかも、彼女は他の同級生には何も言わないで、私だけにそれを教えてくれました。彼女が将来どうなるのかということより、このような清い心を持って

いることが大事だと思いました。

私が訪れた小学校や中学校では子どもたちが活発で元気に私と話していたのに対して、高校生はもう少しおとなしくて恥ずかしがりやでした。どのような生徒に会っても、訪問者にとっておそらく最も重要なのは、クラスの様子を数分観察して、どんな活動がそのクラスに一番合うのかを素早く判断できることだと思っています。例えば、クラス全体があまり集中できない雰囲気であれば、20分ぐらいハンガリーについて話しても余り楽しくならないだろうし、踊りたくない雰囲気のクラスに無理矢理に民族舞踊を踊らせるのもよくないでしょう。つまり、少し柔軟性を持って学校を訪問するのが不可欠だと思います。

最後に、学校訪問は人生の特別な思い出になるだけでなく、英語や日本語の練習にもなるし、他の留学生と一緒に行くので他国についての知識も高めることができます。ハンガリーを紹介する上でかなり自由に活動できるというのも魅力です。ハンガリーの民謡を歌ったり、ハンガリーの民族舞踊を生徒や担任の先生と一緒に踊ったりすることも楽しいと思います。子どもが好きな方、それから日本の学校でハンガリーの様々な所を紹介したい方々におすすめします。

(コルモシュ・リタ)

留学生自己紹介

ハンガリー語と私

Balassi Intézet

古澄 直子

ハンガリーに来て早半年。私は今Balassi Intézetという語学学校にて10ヶ月のプログラムでハンガリー語を勉強しています。「なぜハンガリー語なのか?」。初めて出会った人々に、何回この質問を聞かれたことでしょうか。正直なところははっきりとした理由はありません。ハンガリー人の友達が



いたり、ハンガリーに行ったことがあったわけでもありません。私の場合、ハンガリー語を選んだのは本当に偶然なのです。大学では何か外国語を学びたいな、とただ漠然と考えていた高校生の頃、オープンキャンパスへ行きました。専攻語ごとに教室で説明会が行われており、なんとなく入ってみた教室がハンガリー語専攻でした。ハンガリーについて何ひとつ知らなかった私ですが、ほんの1時間の間に見聞きしたハンガリーの風景や文化に心をひかれました。なぜだか分からないですが、ここで勉強したい!と思ったのです。それから今に至ります。

実は、今回、私にとっては2回目のハンガリーです。1年生の時に、デブレツェン大学で2週間のサマースクールに参加していました。まだハンガリー語を始めて3ヶ月。挨拶程度しかできないレベルでしたが、とりあえず行ってみよう!と思い、応募したのを覚えています。今まで写真だけで見ていた景色を実際に見たときは、感動しました。そし

て、また絶対ハンガリーに戻ってこようと心に決めてから2年が経ち、今ここで勉強しています。

バラッシでの授業は全てハンガリー語で行われます。午前中は言語、午後からは歴史や地理、文化などハンガリーについての様々なことを学びます。初日から大量のハンガリー語がふりかかり、ついていくので精一杯。日本で2年半勉強してきたはずなのに、こんなにも出来ないものか、と自分の力の無さに落ち込みました。問題を解いてもみんなよりできなかったり、意見を求められた時に上手く話せなかったりすることが続き悔しくて、最初の3ヶ月ほどは部屋に戻ってから泣くこともよくありました。月日が経つにつれて、「本当にハンガリー語は上達しているのか?」と焦りを感じることもしばしば。しかし泣いていても何も変わりません。言語を上達させるにはとにかくやるしかないと思いました。

そこでまず、積極的にハンガリー語を使う機会を作りました。ハンガリー人の友達と会って会話したり、ハンガリー語で映画を見たり本を読んだり、ハンガリー語に触れる時間を増やしました。また、この単語の意味が分かるようになったとか、今日はいつもとより自分から話すことができた、とかどんな小さなことでも良いから日々自分の成長を見つけることにしました。小さい喜びが勉強のモチベーションにつながりました。そのおかげか、セメスターも後半に入った今となっては、先生の言っていることも前期より理解できるようになったし、授業が楽しく感じるようになりました。

振り返ってみると、悔しいという気持ちを持てたことは良かったのかもしれませんが。こんな偉そうに書いていますが、私のハンガリー語はまだまだです。もちろん今でもしんどいことはあるし、必死にしがみついている状態ではありますが、それでも少しずつ余

裕がもてるようになったと思います。私のクラスには3人のセルビア人、ポーランド人、ブルガリア人、中国人がいます。みんな勉強熱心なので、私も刺激される日々です。授業中分からないところがあればお互いに助けあったり、時には一緒に出かけたりご飯を食べに行ったりもします。みんなで部屋に集まってテスト勉強をしたのも良い思い出です。

ここまで勉強の話ばかりを書きましたが、もちろん留学生活はそれだけではありません。休日には街中を散歩したり、カフェに行っておしゃべりしたり、長期休みを利用して近隣の国々へ旅行にも行きました。ヨーロッパの美しい街並みや風景を見たり、その国ならではのものを食べたりするのは楽しいです。しかし、帰りの列車や飛行機でハンガリー語が聞こえてくるとなんだか安心するし、ドナウ河に架かる鎖橋やライトアップされた国会議事堂を見ると、やっぱりこの景色が一番好きだなあとハンガリーに戻ってくるたびに実感するのです。

さて、そんな私の留学生活も残り3ヶ月を切りました。終わりが見えてくるにつれて毎日が今まで以上にものすごいスピードで過ぎていくような気がします。留学生活を通して学んだことはハンガリー語だけではありません。ハンガリーの生活や文化を実際に目で見て肌で感じ、考えさせられたことも多くあります。ここでの経験、出会った人々全てが私にとってかけがえのないものになりました。留学が終われば、日本で残りの大学生活が1年半待っています。どんな仕事に就くか、どこで何をするかはまだ模索中です。しかしこの留学生活と大学で学んだことを生かして、少しでもハンガリーに携わられるようなことが出来ればと考えています。そしていつかまたハンガリーに戻ってこよう、と2年前と同じように心に決めました。

残りのハンガリー生活、まだまだたくさんのことを吸収して、最後まで悔いのないよう1日1日を大切に過ごしていきたいと思っています。

(こずみ・なおこ)

留学生自己紹介

12月のブダペスト

:学会発表とテレビデビュー

大阪大学大学院博士前期課程

松井 拓史

2017年12月に1週間ほどブダペストに滞在したのだが、いきなりその話を始める前に、簡単な自己紹介を兼ね、昨年末の滞在に至った経緯を書いておこうと思う。筆者は2010年から大阪大学でハンガリー語を4年間学び、その後大学院で音楽学を専攻している。専門は一応のところ第二次大戦後のハンガリーの音楽史・芸術史で、社会主義時代に結成された、民俗舞踊や民俗音楽を舞台用にアレンジして上演する民俗舞踊団を主な研究対象としている。2015年9月から翌年8月までの約1年間、調査のためにブダペストのリスト音楽院へ留学していた。同音楽院の演奏科には多くの日本人留学生がいて、彼らの活動の成果は演奏会やコンクールで目にすることができるが、演奏ではなく研究を専門とする筆者のような人間がその成果を発表する場合は、主に論文発表と学会発表の2つである。そして今回の滞在の主たる目的は、ハンガリーの作曲家であるコダーイ・ゾルタンの没後50年を記念して開かれた国際学会に参加することであった。

人からもよく言われるのだが、筆者はとにかく楽天的で、暗い気持ちになって何もできなくなるだとか思い悩んで夜も眠れないだとか、そのような経験はほとんどしたことがない。その一方で、ちょっとどうにかしないといけないほどの健忘でもあって、つい数日前に読んだ本の内容でも、自分が口に出したことで、あっという間に忘れてしまう。だから、さっきの「そのような経験はほとんどしたことがない」というのも、単に忘れてしまっているだけという可能性は非常に高い。今回の件でも、学会に応募したことをすっかり忘れていて、発表が受理されたという旨のメールがきて思い出すという始末であった。幸い、発表当日まで2ヶ月半ほ

どあり、内容も当時執筆中の修士論文の一部であったから、かなり楽観的に発表準備を行っていた。

ところが、出発まで1ヶ月少しというところで想定外の事態が起きた。事の発端は、ハンガリーの敏腕テレビリポーターであるバイエル・イロナ氏(写真中央の女性)が大阪大学で行なった講演会を聞きに行ったことである。かなりおもしろい人らしい、という前評判通り、遮られようがお構い無しの饒舌さで語られる彼女の経歴や数々の体験談、そして生命力と好奇心に満ちた目からは、筆者がこれまで会った誰よりも強烈な印象を受けた(噂によると、とあるハンガリーの記事が彼女に「充電不要のバッテリー」というあだ名をつけたらしい)。講演会終了後、筆者は彼女に、12月にブダペストへ行くこと、そこで自分の研究に関する発表を行うことを告げた。こちらとしては、学会の合間に軽くお茶でもできればという気

専門分野に関してもささやかながら言いたいことも出てきた。そんな自分がハンガリー社会でどれほど通用するのか、このインタビューを通して試してみようと思ったのである。これまでそのようなインタビューを受けたことなどなかったが、不安はまったくなく、イロナと2人でのプライベートインタビューならばむしろ楽しみで仕方がなかった。

ところが、出発日の12月5日にさらなる想定外が起きた。午前中に関西空港に到着し、これからハンガリーへ向かう旨をイロナにメールしたところ、彼女から「M5(ハンガリー国営放送局の1つ)の朝の番組に生出演することになりそうだ」という返事が来たのである。これはちょっとまずいぞ、と思い、出演予定の番組名をインターネットで検索したところ、どうやら2人のインタビュアーと対峙して5分間ほど話すコーナーのようである。ちょうど日本の「徹子の部屋」に似



持ちだったのだが、彼女の返答は全く想定外のものであった。「それは素晴らしい!ぜひあなたのインタビューを撮りましょう!」。この突然の提案は、しかし魅力的でもあった。ハンガリーと関係を持ってから約8年、ハンガリー語もある程度身につけ、自身の

プライベートインタビューだと思っていたものが、まさか生放送の「尋問型」になったのだから、さすがの筆者も焦り、飛行機の中では学会発表の準備どころではなかった。

留学生自己紹介

ここまでが、ブダペスト到着までの経緯である。そしてここからがやっと滞在中の話になるのだが、正直なところ、あまりに忙しすぎたのかほとんど記憶がない。それでも、何も書かないというわけにはいかないので、記憶の残滓をたどって滞在中の出来事を綴ってみようと思う。



今回の滞在の主たる目的であった国際学会は、これまで「ハンガリーの音楽家」と評されてきたコダーイの活動を、国際的な文脈の中で捉えなおしてみようという趣旨のもと、3日間にわたって開催された。学会発表というのは、もちろん自身の成果を発表する場でもあるのだが、それと同じくらい(もしくはそれ以上に)、同業者との交流が重要である。筆者はランチタイムの時間に、かねてから話したいと思っていたハンガリー音楽学界の重鎮であるショムファイ・ラースロー氏や、研究関心が類似している若手の研究者と知り合うことができ、そういう意味では今回の学会発表の機会を有効に使うことができたと思っている。

そして例のインタビューは、筆者の発表の翌日に行われることとなった。朝早く、イロナがホテルの前までタクシーで迎えに来てくれて、ブダ側の奥地にあるM5のスタジオへと向かった。到着後、まずはメイク室へと案内され、なんだか色々よく分からないものを顔に塗られたのだが、担当してくれた女性が怪訝な顔をしていて、向こうも向こうで、なんだかよく分からない奴が来たな、と思っていたのかもしれない。その後、番組ス

タッフや責任者のおじさんと軽い挨拶を交わし、スタジオの中に連れて行かれたのだが、打ち合わせはいつするのかと尋ねたところ、「そんなものはないよ!あと3分くらいで出番だから、頑張っ!」という衝撃の言葉が返ってきて、一気に冷や汗が吹き出したのをよく覚えている。そして、そのままカメ

ラの前に放り出され、必死で質問に答えているうちにあっという間にインタビュー終了、というのが実際の感覚であった。ただし今になって考えてみると、こちらもちろで大変な目にあったが、もし万が一筆者がアブない人間で、打ち合わせもせず本番に突入して放送事故でも起こしたらどうするつもりだったんだろうと思う。おそらく、イロナが連れてくる奴なら大丈夫だろうということなのだろうが、それでもテレビ局の度胸というか放胆さというか、とにかくそういうものを実感する出来事であった(もしかしたらそんなことは何も気にしていないという可能性もあるが)。

そして、実はイロナがもう1つインタビューを準備してくれていたのだが、これが筆者にとっては今後の研究の突破口となるものであった。というのも、筆者が研究対象とする民俗舞踊アンサンブルの現芸術監督であるミハーイ・ガーボル氏に許可を取り、最新プログラムのリハーサル見学、そしてミハーイ氏と筆者のプライベートインタビューをセッティングしてくれたのである。ここにもテレビの取材が入ることになっていたが、今度は生放送ではなく収録だったから、特に緊張することはなかった。ミハーイ氏は、リハーサル中ずっと筆者のそばに立って、プログラムに使用されている音楽や振付の説明をしてくれ、その後のインタビューでは少し突っ込んだ質問にも丁寧に答えてくれた。研究者としてはまだ駆け出しの筆者を対等に扱ってくれ、今後、アンサンブルが所

蔵している楽譜や映像史料を研究のために使用する許可まで出してくれた。筆者は2018年4月から博士後期課程に進学するのだが、早速それらの資料調査へ出かける計画を立てているところである。

以上が、昨年末のハンガリー滞在の顛末である。その後、学会で知り合った若手研究者とはいまもメールでやりとりをしているし、テレビのインタビューを見た人たちから直接連絡をもらうこともあった。その中には、リハーサル見学をさせてもらった民俗舞踊団の元メンバーたちや、初代芸術監督のお孫さんからの連絡もあって、今後の調査にぜひ協力させてほしいという言葉もいただいた。そういう意味では、筆者の研究方針がそれほど的外れでもないということには分かってきたし、この滞在が結果的にかなり大きな意義を持つものになったと言える。

こんな風に、なんだか大変な思いをしたけど最終的にはよい結果が出るというような経験はこれまでもたくさんあって、やはりそれは筆者の、何にでも向こう見ずに飛びついていく性向と、大変なことはさっさと忘れてしまう特性の賜物だろうと思う。もちろん、筆者を受け入れてくれた学会のオーナーやミハーイ氏、多くの機会を作ってくれたイロナにも感謝の気持ちでいっぱいである。またすぐに彼らに会えるのが楽しみだ。

(まつい・たくし)

留学生自己紹介

経験は財産

リスト音楽院

谷口 雄紀

僕は今ハンガリー国立フランツリスト音楽院の修士課程で学んでいます。しかし、もうしばらくすると、僕のハンガリー留学が終わります。本当に充実していて、どの経験も忘れがたいものばかりです。僕が今まで生きてきた中で一番楽しかったです。この思い出や経験を今日みなさんに全てお話しさせていただきます。

まず、僕は小学生の頃からハンガリーリスト音楽院の名前を知ってからずっと留学に憧れていました。高校までは僕の周りに留学生はいなかったのも、とても雲の上にいるような人々のように感じていました。リストの音楽が好きだったこと、本学のテレビ特集を視聴したこと、本学の受験が日本で受けることができたことが、志望の一番大きな理由だと思います。他にも留学先を考えていましたが、まさか本当にリスト音楽院の留学に結びつくとは考えてもいませんでした。素晴らしい世界各国の同期生に囲まれて、日々ハンガリーで勉強できたことはとても楽しかったです。僕はもともと人見知りでおとなしい性格でした。ここまで僕を変えてくれた環境がハンガリーでした。

実際に留学するとぶつかる壁ばかりでした。環境も感覚も文化も違うことに最初は悩まされていました。手続きがうまくいかないことや、コミュニケーションを全くとることができず、トラブルを数えてもキリがあり

ません。自分自ら日本人のいない環境を作り、無茶なことをしてたくさん恥をかきました。しかし、他の留学生の迫力や恥をかいても折れない自信に驚かされました。生徒も先生と対等にコミュニケーションする場面が授業の日課と言っても過言ではありませんでした。僕はとにかくたくさん、可能な限り授業に行っていました。それぞれの

で必死にもがく学生にとっては嬉しいものばかりが溢れていました。室内楽をする喜びも味わって、留学するという醍醐味を全身で感じて本当にもっとも輝いていた3年間だったと思います。ハンガリーは音楽を学ぶ学生にとって史上最大の環境が本当に整っていると心から思いました。僕も陽気ながらも真面目なこの国の虜になった一人です。是非全身でぶつかって思いっきり音楽や言葉でコミュニケーションをとって下さい。その先にある留学する本当の意味を体感して下さい。きっと今までにはなかった世界が開けてきます。

この留学全ての経験が僕の財産です。今後は拠点を変えて、さらに日本と世界を結べるような音楽家になりたいと思います。またそこにも新しい経験や壁が待っていると思いワクワクしています。また、この自分の得た経験を元に人々を助けることができたらいいと思っています。皆さんありがとうございました。

(たにぐち・ゆうき)



授業から数多くのことを一つでも多く吸収したかったからです。ハンガリーダンスレッスン、企画マネジメント、美術史、音楽理論、英語とハンガリー語、室内楽、レッスンなどリスト音楽院のシステムは学生にとって有り難いものばかりでした。ほぼ学内のオーケストラや数々のコンサートに足を運びました。どのコンサートも素晴らしく世界的な名演奏も目の当たりにしました。勉強



みどりの丘補習校



この1年を振り返って

クローク 千晴

私が補習校で教え始めて早6年が終わろうとしています。この6年を振り返っても本当に有意義な6年だったと思います。もともと日本でも子供英語会話の講師を12年近くやっており、ハンガリーに来るきっかけで仕事を辞めることになりました。大好きだった仕事を辞めてしまいましたが、こちらに来て自分に合った講師の仕事に付けるといいなと、思いながら情報を見ていました。

講師になりたい強い思いが届いたのか、すぐに補習校のことを知り、教えることになりました。子供たちを教える事、2か国語の学習になる事などは、私にとっては、12年の経験があったので、そう苦ではありませんでした。ただ、国語を本格的に教えるのは初めてだったので、最初の数年は、教科書をやりこなす。という考えしかありませんでした。しかし、日本人学校の先生方からのアドバイスや研修、経験を積むにつれ、国語の教科書をうまく使ってやっていけば良いのだとわかったのです。そして、6年目の今年2017年4月、新しいクラスが発表されました。今年是小4担当です。小4は初めての学年でしたが、今年小4になる児童は3年前に小1を担当した時のクラスで、2回目の担任となりました。昨年、一昨年と担任をされていた先生方から、いろいろクラスの状況や様子は聞いて

ていましたが、小1から3年経ちどのように成長したのか、実際はどうなんだろう。と、とても楽しみに始業式の日を待ちました。そして、当日、担任の発表をされた時の児童のびっくりした顔が忘れられません。教室に入り、席に着き最初の授業が始まった時から、とても活気に満ちて、とても大きく成長した児童の姿を見て、とても嬉しくなりました。

小1の頃はまず、学習体制を作るという事が目標でしたが、小4では、「自主的に学習する姿勢を作る」という目標で、自分たちで宿題の音読や漢字は進んでやってもらいたいという思いと、日本語学習がまずは好きになってもらい、いろんなことに積極的に取り組める児童、そして、クラス作りをしたいという思いで、この目標にしました。また、学習するにあたり、「好きをわかるに！わかるをできるに！」ということを常に意識しながら、授業の準備や宿題を考えてすすめていきました。毎週の宿題では、現地校の勉強に無理の出ないように、自分たちでやれるだけの宿題を出すことを心がけ、普段は音読と漢字の学習のみに絞り、漢字テストは毎回、宿題のページをそのまま、学習意欲につなげられるように、そのページのすべてを対象にし、解答として書かれているものに出ただけ丸を付け、丸の数の点数をつけてあげました。そして、その点数によって賞状の大きさも変え、毎週賞状を楽しみに漢字学習に積極的に取り組めるようになりました。





みどりの丘補習校



また何をするにも、とても意欲的で、1時間目の音読の時間は、教室に響き渡るくらいとても元気よく音読してくれる児童。物語文では、登場人物になりきって読んでくれる児童。意見するときには、思っていることや感じたことも積極的に手を挙げ発表し、自ら進んで取り組んでくれました。今年は、「教科書をうまく使って学習していく。」という自分への目標もあったので、出てくる単元を上手に使い、「より良い話し合いをしよう」という単元で、12月に行われる学習発表会について話し合いをしました。この中でも司会者と記録、意見する者に児童自らが手を挙げて、それぞれの役割に分かれて、話し合いをしました。何をやりたいのか、どうしてそれがやりたいのかまできちんと話し合いになっており、司会者がうまくみんなの意見をまとめていました。私自身もそこまで児童が自分たちでできると思っておらず、成長した児童たちに驚きが隠せませんでした。その後、「ふるやのもり」がやりたいという気持ちが変わらず、「ふるやのもり」をやるにあたり、自分たちが12月の本番までに何が必要なのか常に考えさせながら、通常の授業とは別に家での自主学習として児童自らの課題を与えました。

クラスで動きを付けて練習したのは、リハーサルのみで短い時間だったため、本番を心配する声も出ていました。しかし本番では、1人1人がその役割をしっかりと果たし、とてもしっかりとやり遂げました。やり終えた後の児童1人1人の達成感に満ちた素敵な笑顔は、とても輝いて見えました。今回の学習発表会を終えて、児

童自らのやる気とクラス一丸となって力を合わせられた事。そして、短い時間で集中してできた事が、その素敵な笑顔と評価に現れたのだと思います。児童の力の素晴らしさにまた感動の瞬間でした。

つい先日、日本に一時帰国し、日本の小4の国語の授業を見させていただく機会がありました。その中で感じたのは、補習校の児童生徒も日本の子供たちに負けなかったと思います。また、1人1人いろんな個性を持ち、家庭環境や学習環境も違いますが、小4のクラスがまとめ、高学年に向けての目標の「自主的に学習する姿勢を作る」もほぼ達成できたと思います。まだまだ苦手な分野、クラスみんなで考えるべき課題などありますが、通常現地校で勉強しながら、でも一生懸命国語学習に取り組んでいること。これは、保護者の皆様の支えがあったからだと思います。お子様の成長と一緒に見ていただき、家庭でもご協力していただき、本当にありがとうございます。そして、講師の仕事は終わりがありません。特に子供を教えているこの仕事は、日々の変化があり本当に常に勉強が必要です。児童生徒とともに自分も成長していけるように、これからも日本語学習をより楽しく学習してもらえるように、笑顔が増えるように、そして、「好きをわかるに！わかるをできるに！」を意識して、やっていきたいと思っています。

(くろーく・ちはる)





みどりの丘補習校



充実した補習校での1年

山本 泉

息子がブダペストにあるみどりの丘補習校に新1年生として入学したのは、2017年の春のことです。それまで日本語の幼児サークルなどにも参加しておらず、ハンガリーで日本語を用いて活動する場は初めてでしたので、あまり状況を理解できていないまま、少々緊張した面持ちでほかの新入生達と壇上に上がって座っていたのを覚えております。そんな入学式から、早いものでもう1年がとうとうとしています。

私が息子を補習校に通わせたいと思った理由は大きく二つあります。

息子はハンガリーへ越してくる4歳までほぼドイツで育ち、私とは日本語だけで話をしていたのですが、ハンガリーへ引っ越してこちらの幼稚園に通うようになり、ハンガリー語力がついてくるにしたがって、私と日本語で話すことも徐々に少なくなっていきました。そして、年齢が上がるにつれて、自分が伝えたい内容に日本語の語彙力が伴わなくなっていくようで、現地校へ入学するときにはすでに、私が日本語で話しかけても返答はハンガリー語という状態でした。ですので、補習校への入学を決めた理由の一つには、やはり、このまま日本語を忘れてほしくない、もう少し日本語力をつけてあげたいという思いがありました。

それともう一つ、前々から私が強く思っていたことがあります。私たちの家族はブダペストから約8km離れた、人口約3万人の地方都市に住んでいるのですが、ここでほかの日本人に会うことはまずありません。この町で日本人でありハンガリー人でもあるのは私の息子と娘だけです。二重国籍の子供が自分のアイデンティティやルーツといった問題に悩むことが多いというのはよく言われることで、将来、もし息子がそのような問題にぶつかったとき、それについて語り合える同じ状況にある子供たちと交流する場を持たせてあげたい、というのは以前から思っていたことでした。

しかし、正直なところ、平日より早く起床し、毎週土曜日に約1時間半かけてブダペストへ行くのは遊び盛りの息子にとって肉体的、精神的にもかなりの負担になるのではないかと不安があったのも事実です。

そんな気持ちで迎えた最初の1年でした。新1年生のクラスは8名からスタートし、途中で編入生を加えながら現在は10名のクラスになりました。週1回の授業で日本の小学校と同じ内容を習得しなければならないこともあり、授業のスピードも速く、そのスピ

ードについていくため、家庭での宿題も重要視されます。子供たちにとっても先生方にとっても大変な状況ではあると思いますが、1学期を終えたとき、ひらがなをほぼ全く読めなかった息子が、ひらがなの文章を読めるようになり、補習校での学習の成果を実感したのを覚えております。

カタカナは夏休みの間に学習し、2学期からは漢字も徐々に入ってきたので、完璧に消化できているかというと、正直申し上げて私たちの場合、それは残念ながらできておりません。しかし、確実に日本語力はアップしており、さらに日本語、特に文字への興味が出てきたことがこの1年での大きな収穫だと思います。時々現地校にも嬉々として日本語の教科書を持って行き、お友達にひらがな、カタカナを教えたり、機会があれば日本の祖父母へ手紙を書いたりしており、以前はまったく興味を持たせることができなかった日本語で書くことへの興味が出てきたことに個人的には嬉しく思っております。

2学期も終わりに近づいた12月に開催された学習発表会は、全学年の生徒がその1年学習した成果を発表する場なのですが、1年生らしいかわいらしい発表をみんなで堂々とできていて、素晴らしいと思います。上級生の皆さんも、それぞれの学年にふさわしい、趣向を凝らした素晴らしい発表をなさっていて大変感心いたしました。「継続は力なり」とはまさにこのことだなと思ったのを記憶しています。

1年間補習校に通ってみて、確実に「日本語でできること」が増えたと実感しております。それとともに、補習校での学習には家庭での宿題のサポートが不可欠であり、学習項目の消化不良を起こさないためにも、毎日日本語を少しずつ勉強する癖をつけないといけないということも実感しております。現地校、習い事などで平日は忙しいのですが、その中で少しでも日本語に触れる時間をうまく作れるようにすることが、これからの課題です。

それから、私が重要視していた「子供たちとの交流」、という点ですが、補習校では、入学してから比較的早い時期(5月)に遠足が行われます。全校生徒と先生たちが1日行動とともにし、日本語でコミュニケーションをとりながら交流を図るよい機会となっています。縦割りのグループで行動するのですが、新1年生にとっても上級生と知り合える機会が入学してすぐあるのは、よいことだと感じております。

学校でも、授業と授業の間の休み時間にはクラスのお友達と仲良く元気に遊ぶ息子の姿を見ることができ、嬉しく思っております。息子本人も、毎週クラスのお友達に会うのを楽しみに補習校に通っているようです。一度、毎週土曜日にブダペストに通うのは





みどりの丘補習校



大きな負担になっているのではないかと思います、「次年度は休学して、家で自分のペースで勉強してみる？」と聞いてみたことがあります。息子の答えは、「学校でお友達と一緒に勉強したい」というものでした。学校に行きたいと思わせるような、楽しいクラスづくりを心がけてくださった先生に、大変感謝しております。

ハンガリーでは日本人と言われ、日本に行けば外国人とみられることの多い息子ですが、自分と同じような環境にいる子供たちと交流できるだけでも、補習校に息子を入学させたかいがあったなと私は思っています。

今後も補習校で学年を重ねつつ、細々とでもいいので長く日本語学習を続け、日本語と補習校での体験が息子の人生の糧になればと願っています。

最後になりましたが、1年間熱心に指導してくださいました先生方、補習校がよりよい学校になるよう日々努めてくださっている運営委員会の皆様、この場を借りて感謝申し上げます。

(やまもと・いづみ)



Propart Hungary Bt.

各種音楽・芸術文化・国際交流イベント企画製作を中心とした業務の運営。
ハンガリーを拠点にグローバルな企画・マネージメント展開を行っています。
お気軽に、御相談下さい。

【主な業務内容】

- ・音楽企画・マネージメント業務
- ・ヨーロッパ各国のコンサート/オペラ・バレエ・オペレッタ・舞踊・各劇場公演
- ・音楽講習会/プライベートレッスン/音楽研修企画
- ・国際交流事業サポート
- ・若手音楽家の推進育成サポート
- ・東欧・ハンガリー留学サポート・現地コーディネート
- ・短・長期賃貸物件仲介業務(ブダペスト市内を中心とした、ハンガリー国内)
- ・各種通訳・翻訳サポート(ハンガリー語、英語、ドイツ語、日本語)
- ・購入・レンタルピアノ
- ・輸入・輸出楽器
- ・各種現地サポート(主にハンガリー、東欧、ヨーロッパ各国)
- ・文化・芸術関係テレビ取材・撮影・リサーチ・コーディネート等
- ・ハンガリー発日本語情報誌『パブリカ通信』発行
- ・その他、音楽制作に関わる一切の業務

Propart Hungary Bt.

Tel: +36-1-786-7846 / Mobil: +36-70-3815548

e-mail: proparthungary@upcmail.hu

proparthungary@gmail.com

web: <http://propart.client.jp/>



DESIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺1枚からご希望の言語にて
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。



SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu

Inner Design Group - 1021 Budapest, Bognár utca 7.

Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu



みどりの丘補習校



二重国籍？ バイリンガル？

坂井 圭子

「今日も学校に行くの？まだ、眠たいよ。」という声が聞こえてきそうな土曜日の朝、みどりの丘補習校には多くの二重国籍の子ども達がやってきます。

補習校では、年間約35日、毎週土曜日の9時から12時半まで国語を4時間勉強しています。現地校は6月半ばで夏休みに突入しますが、補習校は6月末まで続きます。ここ最近では小学部1年生の入学者が10名近くに増えてきており、平成30年度には児童生徒数が50名以上になる予定です。1年生の学習を始める子の

スト勉強にも取り組み、さらに毎土曜日午前中に補習校での国語学習を継続しているこの子ども達だからこそ、「羨ましいなあ」と言われるに値するのではないかと強く感じます。生まれ持った二重国籍というステータスだけでは、日本でよくもてはやされるようなバイリンガルにはなれないからです。

このような子ども達の並々ならぬ努力の陰には、保護者の存在があります。宿題のサポート、土曜日の送迎、補習校での様々な係りなどを請け負い、協力を惜しまない方がたくさんいらっしゃいます。日本人ではない保護者も様々な形で支援されており、両親が一丸となって子どもの教育に携わる姿が見られるのは、補習校の特徴かもしれません。



半はまだ現地の幼稚園に通っているため、4月はまず日本的な学習習慣を身につけることから始まります。低学年のうちは意気揚々と登校してくる子ども達も、学年が上がるにつれて眠気眼をこすりながら登校するという姿に変わって行きます。ようやく1週間の現地校が終わった金曜日の夜にも補習校の宿題と格闘したり、遠距離通学の車中で音読テストや漢字テストの練習をしたりするという子どももいます。週6日目となる土曜日の勉強は想像以上に大変で、特に高学年では、現地校との両立が何よりの課題となってきます。

「お父さん(お母さん)が日本人なの？いいわねえ。二つの言語を話すことができて。羨ましいなあ」。周りから見ると、二重国籍の子ども達はそうに映るのでしょうか。実際、補習校の中学部を卒業する子ども達の多くは、しっかりと国語力を身につけて卒業していきます。一概に「国語力」と言ってもその幅は広く、話す力、書く力、聞く力、日本語を使ってコミュニケーションができる力、日本語で思考する力と多岐に渡ります。平日は現地校での学習に加え、宿題やプロジェクトなどに追われながらも補習校の宿題やテ

さらに、みどりの丘補習校では、国語の学習と並行して、その背景となる日本文化についても学んでいます。入学式や卒業式といった儀式や遠足や学習発表会といった行事を通して日本体験をします。言語は文化の一つに過ぎません。日本とは何ぞや、日本人とはどんな人、日本の考え方とはどんなものかといった日本を理解するための体験を通して、バイリンガルになっていくのではないのでしょうか。日本では常識として扱われることも、一旦外国へ出ると非常識となることもあります。そのような文化の違いを理解しようとしてこそ、ようやく言語を操れるようになっていくのではないかと思います。

補習校に通う子ども達は、自分がバイリンガルになって羨望の眼差しを向けられるためではなく、時には喜んだり、時には苦しんだりしながらも自分に与えられたチャンスとして受け止めてがんばっているように私には映ります。そんな子どもの親として、補習校運営委員の一人として、残り1年となりましたが、子ども達のサポートに尽力したいと思っています。

(さかい・けいこ みどりの丘補習校運営委員)



日本人学校

二人のアモーレ

柴田 果凜

私は中三の二人からたくさんのことを学んだ。日本人学校に来た去年は、二人をただの「格が違うクラスメイト」という認識しかなかった。私はすごいと思う人を下から見上げるような性格の人間だ。でも時間が経ち、二人のことを知っていくうちにすごいという認識だけではなく、二人のようにになりたい、二人に追いつきたいと思った。これは、他の人からみると当たり前のことかもしれないけれど、私は初めて思ったことだ。

私は、日本の中学校では仲の良いグループの人とばかりつるんでいて、クラスメイトとも他のグループの人とはあまり喋ることもなく、興味もあまりなく、上っ面だけの関係で終わっていた。はたから見ると、楽しそうな会話でも、実は相手の機嫌を見て、探り合いながら話すということは日常茶飯事だった。いつでもどんな時でもグループの人と行動する、部活や委員会も仲の良い人と一緒にいいと日本の女子中学生の大半が思っていると思う。私もその中の一人だった。でもそんな私の思考を日本人学校が、中三の二人が変えてくれた。

私は日本の仲の良い子の中でも二、三人しか信用できる子はいなかった。どうせここに来

てもそこまで信用できる友達はいないだろうと思っていたから、今まで通り「平和」にやっていこうと思っていた。でも、そんな私の描いていたフツウの中学校生活の道筋は大きく変わった。それはクラスメイトの二人が愛実ちゃんとルーキーだったからだ。

ドナウ祭や運動会、児童生徒会の事でいるんな壁にぶつかり何度も失敗を繰り返し、嫌になってくることもあった。でもそのたびに、みんなで悩んで解決していくことで、乗り切ることができた。三人で同じ課題について考えることで相手の意見の方向性が分かり、意見交換も活発になった。授業で自分の本当の意見をそのまま言えるのも、二人が私の意見が理解できないならできないと言って

くれるからだと思う。本音でぶつかり合うことで、新しく見えてくるものもあった。このことを通して、自分の意見を言う大切さを学んだ。またこういうぶつかり合いを通して、二人が信用・信頼できる仲間になっていった。

私は基本的にネガティブな人間だから、何かあるたびに失敗することを考えてしまい胃が痛くなる。しかし、二人は普段の授業や休み時間でも、頑張れ、大丈夫と言ってくれた。仲間が隣にいてだけで不安が無くなり、安心できた。笑顔を見せてくれると私の気分も上がった。応援してもらったときに頑張ろうと思った。「できる!」と言われると「できるようになろう」と思うと同時に、できる気もしてきた。言葉一つで、仲間や先生の存在一つで私の思考も変わった。

このことを通して、言葉の大切さ、仲間の大切さを学んだ。

このように、私は日本人学校の皆、そして中三の二人から、たくさんことを学んだ。そして、愛実ちゃんとルーキーという大きな目標もできた。同じ学年で、同じ時間を過ごしている人を目標と言うのはおかしいかもしれないけど、それでも二人は、大きな目標であり、大切な仲間だ。三人とも住んでいる場所が遠い



し、これから目指す場所も違うと思う。そして大人になったら、全く違う道を進んでいくことになると思う。人生の六分の一も生きていない私が言うのも変だけど、二人は一生私の目標になると思う。そして一生忘れることのない、かけがえのない人になると思う。

日本人学校の皆に、先生方に、そして私の中学校生活を変え、「優しく白き手を伸べて」くれた、中三の二人に感謝をして、教えてくれたいろいろなことの大切さを忘れずに、日々、励んでいきたいと思う。

(しばた・かりん 中学部3年生)

ハンガリーダンスから学んだこと

田村 心奏



「えーやだー、はずかしい」

これは、ハンガリーダンスを教えてもらう初日に私が言った言葉。先生に男子と女子でペアになってと言われた時だった。そして、約2か月後に迎えたドナウ祭当日。

「キャー」

「ホッ」

たくさんの声が上がリ、男子と女子が輪になって踊る。

「へーイ」

これが最後。終わった瞬間、達成感を感じた。それは、なぜか。約2か月間の練習の積み重ねがあったからではないだろうか。

本番で私が心がけていたこと。それは、「笑顔で踊る」ことや「堂々と踊る」ことだ。

「笑顔」は、初めのころは、とにかく上手に、間違えずに踊ろうという気持ちでいっぱい、まだ気にしてもいなかった。しかし、どんどん練習を重ねていくうちに、私の気持ちが変わっていった。笑顔で踊っていると自分もとても楽しいし、見ている側もとても楽しい気持ちになるということに気付いた。そこから私は、笑顔に気をつける

ようになった。

「堂々と」というのは、間違えても一生懸命に踊り続けるという意味だと私は思う。間違えないのも、もちろん大切だと思うけれど、それを気にして小さな動きになるより、堂々と胸を張って踊るほうが、かっこよくなると私は思った。

それに気付けたのは、一緒に踊っている仲間がいたからだと思う。仲間と共に教え合ったり、助け合ったりしていた中で、新しい目標を持つことができた。その目標に向かって努力していった結果が、ドナウ祭当日のハンガリーダンスだ。このような日々の積み重ねがあったから、達成感を感じられたのだと思う。

ドナウ祭のハンガリーダンスから、仲間がいることのすばらしさや目標を持つことの大切さを改めて知ることができた。仲間は、私に私自身のことを気付かせてくれた。また、目標を持つことで、私自身の成長に気付くことができた。これからは、仲間とともに協力して、自分自身の目標をもち、日々の生活を送りたい。そして、目標をクリアするためにしっかりと努力していきたい。

(たむら・ここな 小学部6年)



編集部よりのお知らせ

「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。
<http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書をお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

GERE

GERE ATTILA PINCÉSZETE

薬剤に頼らない、自然のサプリメントを！
赤ブドウのポリフェノールを凝縮した
オイルと粉末で健康を維持しましょう！



KÉKSZŐLŐMAG & HÉJ

ポリフェノミクロン(商標登録申請中)

ポリフェノールをふんだんに含む有機栽培赤ブドウの果皮と種を粉砕したマイクロ粉末

ポリフェノール成分: 5gの粉末はおよそ250mgのポリフェノールを含む。

使用法: 粉末をそのまま食することは避け、ヨーグルトなどに混ぜて食する。

1日の摂取量: 1日に小さじ1杯の粉末を2会に分けて摂取。

100 % SZŐLŐMAG OLAJ

ポリフェノールと不飽和脂肪酸を含んだ赤ブドウの極上低温圧搾シードオイル

成分構成: 不飽和脂肪酸 min. 80%, ポリフェノール min. 6%

使用法: サラダなどの冷たい食べ物に直接かけたり、パンへ直接かけて、ほのかな香りを楽しみ、食欲を増進。

1日の摂取量: 小さじ1杯(およそ5g)を毎朝、可能な限り、空腹時に摂取するのが望ましい。

SZŐLŐMAG & HÉJ MIKROŐRLEMÉNY

ポリフェノミクロンはカプセル製品でも販売されています。

GERE通販サイトで購入できます: <https://gere-club-japan.com>

Heat Therapy in Oncology—Oncothermia
New Paradigm in Hyperthermia
Andras Szasz and Tsuneo Morita

腫瘍温熱療法—オンコサーミア

ハイパーサーミアのパラダイム転換——医術から医学へ

サース・アンドラーシュ／盛田常夫〔著〕



日本評論社

温熱治療のパラダイムを転換する

温熱治療を根本から見直し、
あるべき手法を示した著書。

曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。

オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。
ドイツでは百か所以上のクリニックで、
韓国の主要な大学病院に設置。

好評発売中。定価3200円+税。
大手書店、Amazonにて購入可。

第4章 腫瘍温熱療法

- 4.1 腫瘍温熱治療の基本概念
- 4.2 ハイパーサーミアの手法
- 4.3 熱の作用と併用効果
 - (1) 熱と血流
 - (2) ハイパーサーミアの併用効果
- 4.4 ハイパーサーミアの熱生成
 - (1) アンテナ放射
 - (2) 磁場(コイル)
 - (3) 容量性カップリング
 - (4) 伝導加熱
- 4.5 ハイパーサーミア治療が抱える問題

第5章 オンコサーミアの理論と方法

- 5.1 電場の利用
- 5.2 細胞燃焼
- 5.3 腫瘍治療における細胞加熱
- 5.4 ミクロスコピック加熱
- 5.5 集束化の原理
- 5.6 温度の役割
- 5.7 安全性
- 5.8 積算量(ドーズ)
- 5.9 臨床事例

第6章 自然療法としてのオンコサーミア

- 6.1 ホメオスタシスの復位
- 6.2 細胞の自然死の促進
- 6.3 細胞転移の阻止
- 6.4 転移がん細胞に作用

第1章 ハイパーサーミアの歴史と評価

- 1.1 ハイパーサーミアとは何か
- 1.2 ハイパーサーミアの曖昧さと課題
- 1.3 ハイパーサーミアの歴史的概観
- 1.4 腫瘍治療のハイパーサーミア

第2章 ハイパーサーミアの物理学

- 2.1 電磁気学の基礎概念
 - (1) 電磁気現象
 - (2) 電場と磁場
 - (3) キャパシタ
 - (4) 位相シフト
 - (5) インピーダンス
 - (6) 電磁波
- 2.2 バイオ電磁気学
 - (1) 電磁波スペクトル
 - (2) バイオインピーダンス
- 2.3 「非熱」効果
 - (1) 非温度依存(NTD)効果
 - (2) 電磁場におけるNTD効果
 - (3) 電磁気による目標選択
 - (4) 電磁気と生体システム

第3章 ハイパーサーミアの生理学

- 3.1 生体におけるエネルギー、熱、温度
- 3.2 生体における温度制御
- 3.3 生体の加熱と体温
- 3.4 加熱による温度の分布
- 3.5 全身加熱と局所加熱の本質的な差異
- 3.6 加熱と冷却:リスクとその回避
- 3.7 温度測定と熱積算量(ドーズ)



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込） ◆A 5 判／ ISBN 4-535-55473-0 日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学
部の定番テキスト。体制転換の理論と転
換直後の現状を分析。各大学で教科書と
して使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の
比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体
制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。

ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を
輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

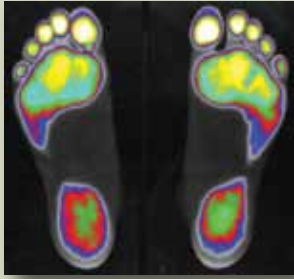
盛田 常夫著

日本評論社

定価3800円



足裏圧力測定から オーダーメイドのインソール制作

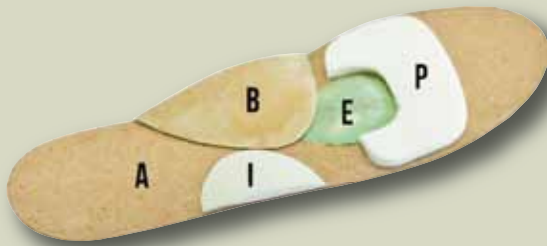
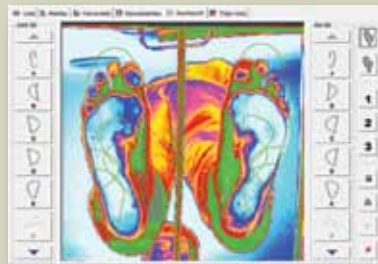


理想的な圧力図



あなたの足裏圧力を
測ってみませんか？

自分にあったオーダーメイドの
インソールを造りませんか？



熟練したデザイナーが貴方に適した
インソールを作成し足裏圧力を矯正します

ハンガリーPodiart社が制作する オーダーメイドのインソール構造

